

文書館の逸品展

# 高見家文書に見る 吉野川中流域の産業

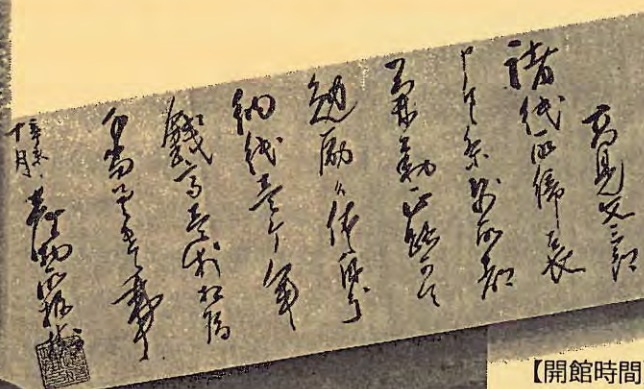
平成30年1月30日(火) ▶ 4月22日(日)

徳島県立文書館 2階 展示室

麻植郡(現吉野川市)の商家である高見家に残された資料を中心に、江戸から昭和にかけて吉野川中流域で見られた藍業・養蚕業・製紙業・凍豆腐製造業・鉱業等の各種産業について紹介します。



入場  
無料



【開館時間】午前9時30分～午後5時  
【休館日】毎週月曜日・毎月第3木曜日  
(月曜日が祝日の場合その翌日)  
【展示解説】2月18日(日)・3月18日(日)  
午後1時30分～



文化の森総合公園 徳島県立文書館  
Tokushima Prefectural Archives

〒770-8070 徳島市八万町向寺山  
Tel.088-668-3700 FAX.088-668-7199  
<http://www.archiv.tokushima-ec.ed.jp>





## ごあいさつ

このたび徳島県立文書館では文書館の逸品展「高見家文書に見る吉野川中流域の産業」を開催いたします。

高見家に残されていた史料によると、同家の先祖は戦国時代に讃岐国（香川県）から阿波国に移住し、吉野川中流域の麻植郡川田（現・吉野川市）に居を定めたとされています。江戸時代後期には藍商として発展し、徳島藩の郷鉄砲（富農等が任ぜられた民籍の予備従卒）となって苗字帯刀を許されています。明治以降は地元の郵便局長や町会議員などを務める一方、養蚕組合など各種団体の中心メンバーとなるなど、地方名望家として顕著な活躍をしています。

徳島県立文書館では高見家の御子孫から3,024点の古文書を寄託されております。この高見家文書は、江戸時代以降の吉野川中流域の社会や経済を研究する上で、極めて貴重な史料的価値を有する文書群であると言えます。

高見家文書の内容は多岐にわたっていますが、今回の逸品展では同家の文書群を通して阿波藍業・養蚕業・製紙業・凍豆腐製造業・鉱業など、川田地区で展開していた産業の歴史を紹介します。また、高見家に残されていた貴重な戦前の絵はがきなど、当時の人びとの生活がうかがえる史料も紹介いたします。この展示を通して、近世から近代における吉野川中流域の産業とそこに生きた人びとの生活、そして、そこから見えてくる徳島の歴史を感じ取っていただければ幸いです。

最後になりましたが、井上暁美様をはじめとする高見家ご子孫の皆様、関係者の皆様に心からお礼を申し上げます。

平成30年1月30日

徳島県立文書館長 徳野 隆



「郵便貯金百億円記念」絵はがき  
藤田嗣治 画

1942（昭和17）年 効02298



## 高見家について

1837（天保8）年に作成された「高見記録飢饉来由之事」や『川田町史』・『麻植郡史』によれば、高見家は天文期（1532～1555）に讃岐国（香川県）から移住してきた、土肥氏（細川家家臣）に由来するとされている。1580年前後（天正中期頃）には東川田村高見に拠点を築いたとされる。今回取り上げた高見家は、詳細は不明だが、その分家筋にあたる。商家であるが、1830（文政13）年に郷鉄砲の職に就き、苗字帯刀を許された。縁ある地名から取り、高見姓を名乗り始めたことが前述の「来由之事」に記されている。

明治期の戸主である高見文三郎（1860～1932）は、産業界に大きく貢献したほか、明治・大正・昭和の3つの時代にわたって川田村の村会議員を務め、また、三等郵便局（現・特定郵便局）である船戸郵便局（後に川田郵便局に改称）の初代局長にも就任した。子の文二郎もまた川田町の町会議員を務め、郵便局長を後継している。局長としての文二郎は、簡易保険や郵便貯金の奨励に努め、逓信省から慰労のための給与を毎年のように受けている。また、1942（昭和17）年には当時の逓信大臣から表彰を受け、功績を賞されている。長きにわたり郵便業務に携わってきた高見家には戦前の絵はがきも多く残されており、それらからは当時の世相を見ることができる。



高見文三郎

昭和期の戸主である高見文二郎（1891～1962）が19歳の時の日記『越し方乃記』には、盆栽や詩吟についての記載に加え、二葉亭四迷の著作『浮雲』を讃する書評も散見でき、文化への関心や理解があった人物であることが推察される。この日記は1910（明治43）年7月～9月にかけて書かれたものであるが、これは日本がいわゆる韓国併合という大きなターニングポイントを迎えた、正にその時期であり、当然文二郎も日記の中でそのことに言及している。彼は新聞が報じた御前会議の様子や条約の内容のみならず、「ロンドンタイムズ」や「デイリークロニクル」といったイギリスのメディアが韓国併合をどのように報じているかも記載しており、当時の国際的評価をうかがい知ることができる。文二郎自身は「日本は実に今や島国に非ずして大陸的国家として世界より認めらるゝに至れり」、「我等が社会に躍り出づる頃は、やがて満州の分割ならむか」と心情を述べており、日本の大陸進出への期待感をうかがわせる。地方に住む一青年の率直な感想は、当時の国内の気運を少なからず物語るものなのかもしれない。



高見文二郎

『川田町史』によれば、文三郎は電信架設のための工所用物品のすべてを寄付したり、公衆電話架設のために多額の寄付をしたりしている。1925（大正14）年に兵庫県但馬地方を地震が襲い、死者400人以上という大きな被害をもたらした際には義援金を寄付しており、当時の兵庫県知事から感謝状が贈られている。文二郎もまた川田局電話施設費として多額の寄付をするなど、父子ともに積極的に社会貢献活動をしており、名実ともに地元の名士だったことがうかがえる。



## 藍商としての高見家

藍は、近世阿波国で一番の特産品であり、吉野川中流域で盛んに栽培されていた。高見家は「綿屋」・「かねまさ」の屋号で藍を商い、特に防州（周防国・山口県）の売場を中心に活躍した藍商人であった。その後も、明治20年代まで藍商としての顔を持っていた。

### ① 高見家飢饉由来之事 ㊦00025

高見文三郎は東川田村にあり、寛政期（1789～1801）頃商いを始めている。当初、阿波国内で商売をはじめ、のち東讃州（香川県）の高松・長尾・志度などに商圏を延ばしたという。さらに芸州（安芸国・広島県）尾道・広島へ葉玉（藍玉）積送、帰り船で七島莫産・傘・干鯛・粕物を商ったという。翌年には周防・石見（島根県）・長門（山口県）へ商圏を広げ、葉玉（藍玉）積送、帰り船で石州石吹（銀か）・油粕を商い、特に防州矢内島（山口県柳井市のことか）で藍玉を商った。文三郎の二男政吉（清吉・清助・清輔）が商売を譲り受け、追々繁昌となる。葉玉・干鯛・居賃屋・手形の金貸・農作業を生業としている。

### ②（藍玉）防長売場記録帳 ㊦00679

1827（文政10）年から1851（嘉永4）年にいたる綿屋政吉（高見政吉）の活動を中心に、防州・長州売りの法令・規則などを掲載した記録帳簿。文政10年以降に行われた防・長における藍玉売買の改革に関する史料。

萩藩では国産藍を育てるために専売制度を敷き、国産藍売捌問屋を置いて阿波など他国の藍移入を禁じていた。しかし、藩内の織物産業を支えるには良質の阿波藍を安定的に得る必要があった。そこで国産藍売捌問屋を介して阿波藍商に入津札を配り、制道役を置いて管理を行おうとした。入津札は、綿屋政吉を含む阿州藍商11人が受けたが、旧来から防長との取引をしている阿波商人は多かったため、制道役を増員するなどしたが取り締まりきれなかった。一方、阿波では文化期（1804～1818）から各地に売場株を設けるが、1831（天保2）年に阿波の藍商34人について防長売場株を定めた。綿屋政吉は株が定められる直前、天保元（1830）年8月から翌年8月まで防州年行事を務めるなど主要な地位を占めていた。防長の売場は、萩藩の国産藍優先政策もあり、他国の売場と比べて大きな利益を生むことは無かったようだが、安定した収益は確保できたようである。

### ③（藍玉積送通行願等控綴） ㊦00678

1830（文政13・天保元）年から1888（明治21）年にいたる藍玉・薬の売買に関する文書の控え帳簿。藍方代官・御分一所奉行・川口御番所等への藍玉売買に関する報告書、願書などを含む。玉師として近隣の児島村・舞中島村・西覚円村などから葉藍・薬の買上げを行い、徳島市中の米津屋・防州・大坂へ製品である藍玉・薬を売っている。



## 高見家と川田乾燥場

高見家と川田乾燥場の関係をとらえた最初の史料は、1923(大正12)年の「蚕業成績表」である。作成者として「高見蚕事部」とあることから、養蚕が高見家の経営する事業の1つであったことがうかがえる。前年には川田乾燥場が設置され、この冊子にも、1923(大正12)年から1930(昭和5)年までの組合の様子も断片的ではあるが記されている。1925(大正14)年、高見家の蚕種の製造元と繭の売先が郡是(現・グンゼ)だけに集中していることから、川田乾燥場が「郡是製糸株式会社福知山工場川田乾燥場」に代わったものと思われる。これに伴い組合も「郡是正量取引川田養蚕組合」となる。高見文二郎はその会計係であった。



蚕業成績表(カミ02299)

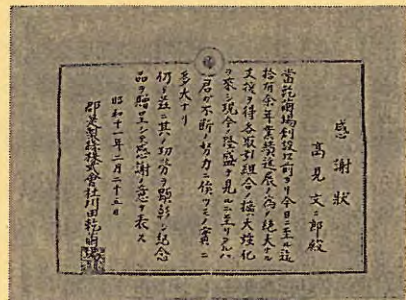
ちなみにこの冊子の記載によると、1923(大正12)年の高見家の繭の売り上げ代金は、366円41銭8厘であったが、最盛期の1929(昭和4)年には1,278円11銭と3.8倍近くにまで伸びており、組合の戸数も1925(大正14)年までの59戸から、翌年には500戸となっている。

川田乾燥場が郡是の乾燥場になる経緯についての詳細はわからないが、高見家所持の「組合長各種書類」によると、1924(大正13)年に郡是から「組合奨励費の一助」として金60円が組合に贈与されている。また、同年の郡是川田乾燥場会計係の「各講繭所資金交付簿」からは、各講繭所(当時は、蔵本・貞光・喜来・半田・芝生・加茂・池田・八幡)にそれぞれ資金の交付の記載がある。

このように、川田乾燥場関連の養蚕組合が郡是正量取引となったことに伴い、川田乾燥場内に繰糸工場を設置してほしいという要求が生じたようである。その「陳情書」が1927(昭和2)年と1930(昭和5)年に組合員から出されている。前者が20組合、後者が39組合からの陳情であったが、受理されなかった。

陳情の挫折から方針を転換したのであろうか、川田乾燥場の高見文二郎は1931(昭和6)年から新取引組合設立のための出張を開始している。「出張日誌」には、1931(昭和6)年7月19日から12月5日まで、香川県長尾町の「いろは旅館」を拠点に大川郡長尾町・富田村・三本松町等での交渉の様子が書かれている。そして、次の年には三好郡方面に出かけて交渉している。こうした努力もあって、1933(昭和8)年には、19の講繭所が開設され、そこには73組合と7町が所属している。

しかし、1936(昭和11年)産繭処理統制法により公的機関による繭の検定制度が実施されると、郡是正量取引川田養蚕組合も1937(昭和12)年に解散した。1936(昭和11)年、高見文二郎は郡是株式会社から「乾繭場創設以前より今日に至るまで、絶大なる支援を得、各取引組合の拡大強化を来した」として表彰されている。



感謝状(カミ00356)

組合解散後、川田乾燥場は1958(昭和33)年、高知県の藤村製糸株式会社を買収された。



## 高見家文書に見る製紙業

川田村（現・吉野川市）は製紙で有名な土地である。近世には、銀札（藩内のみに通用する紙幣）に用いられる紙が漉かれていた。高見家も製紙業に携わっており、その史料の内2点を紹介する。

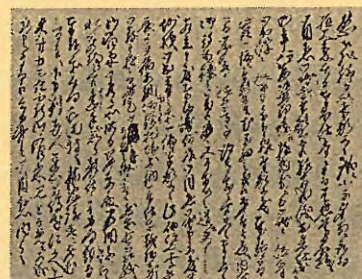
### ①工藤三木次から高見彦太郎への書簡（長州紙一件）2通 宛<sup>マ</sup>01771・01772

この2通の書簡は、同じ事件について書かれている。

1通目の書簡で工藤は、自分ではどうしようもない大変な事件が起こったため、高見との面談を切に願いたい出さいている。その事件とは、長州紙2貫目（約7.5kg）が下才判人（監督者）によって発見されたことである。

他国紙は一定の制限下で輸入され、紙屋問屋によって扱われていた。つまり、長州紙が存在するだけでは問題にならない。おそらく、見つかった時の状況こうぞに問題があったのだろう。詳細は不明だが、工藤が江田村（現・小松島市）へ楮こうぞの皮を受け取りに行った留守の間に発見されている。

2通目の書簡では、うってかわって「件くだんの長州紙は紙役所から買い上げるよう仰せ付けられたものである」と正当性を述べている。代官が工藤の処分の行方を気にかけている、という記述もあり、工藤・高見らと紙方役人の間では、件の長州紙を取り扱うことを承知していたことが推測される。ではなぜ、監督者である下才判人が見咎めたのだろうか。この一件は、下才判人には知らされず、紙漉人と紙方役人との間で了解がなされ、秘密裏に行われていたのかもしれない。これらの史料から、紙を取り扱うことの複雑さがうかがえる。



### ②麻植郡三ツ木木屋平（山間部村々貧困につき製紙業計画立案の件）宛<sup>マ</sup>01032

作成者は当時（明治期）の麻植郡三ツ木村・木屋平村・中村山村の3村は困窮おえしており、その状況は、徳島県下が豊作であっても曼珠沙華（ヒガンバナ）の根を食す者がいる程であると述べている。その原因として「山間ニ執ルヘキ産業ナキニ因ル」と考察している。その“執るべき産業”を興そうとしたのが、中村山村の榎野長十郎らである。彼らは山村に多く自生する萱かやを原料とした製紙方法を発明しようとする。製紙産業が盛んな川田村の高見らに相談をしたのもそのためのである。この「萱紙」は計画だけでなく、試験的に作成もしたようである。この結果が良ければ「村民の喜びは言うまでもない」と述べており、産業化への期待感が文面からよくわかる。非常に興味深い計画ではあるが、その後どうなったのかは不明である。





## 高越山凍豆腐の生産

凍豆腐は麻植郡川田村（現・吉野川市）にそびえ、阿波富士とも称される標高1,133メートルの高越山の裏山、祓川・大内谷より奥の井方面において、1844（天保15・弘化元）年頃より川田村の大坪繁右衛門が、高野山で製造の高野豆腐を手本とし、製造を始めた。わずか1釜（大豆6升5合）から製造を始め、明治後期に隆盛を極めた頃には40釜ほどに達していたようだ。まず、3日間水に漬けた大豆を臼で挽き、釜で炊いて豆腐を作る。それを凍結させ、低温で熟成させた後に乾燥させる。凍豆腐は保存食であり、寒さの厳しい地方では普遍的に生産されてきた。高見家文書には、高見文三郎が組合長・頭取を務めたことのある「氷豆腐製造同業組合」の関係文書がまとまって残されている。

### ①高越山製造・氷豆腐の件 効202404

1928（昭和3）年、川田西尋常小学校の児童により編纂、印刷（ガリ版）されたものが高見家に残されている。高越豆腐の沿革に始まり、製造過程が詳細に描写されまとめられている。巻末掲載の、徳島県工業試験場から高見文三郎に送付された成分分析結果は、当時既に精密な機械が導入され、化学的に分析されていたことがわかる貴重な史料である。（下表参照）

最も隆盛を極めた明治40年頃の業者数は16戸、工場数は52にも及んだが、冷蔵機械の導入により、昭和初年頃には、業者数は高見商店を合わせてわずか5戸、工場数も28まで激減した。

### ②氷豆腐製造同業組合設置願 効00939

氷豆腐製造同業組合の前身は、1872（明治5）年の業者設立の組合である。高見文三郎を組合長に据え、原料、製造、販売、その他各方面において講究し、結果同業者数も増え、凍豆腐が県下における重要物産のひとつとして徐々に認められる様になった。

1884（明治17）年12月、「同盟の便益を謀り物産の隆盛を祈望する」ことを骨子とする組合設置願を出し、後日には組合準則に沿い、規約を作成し許可を請う指示書が県より出されている（本県告示第160号）。

翌1885（明治18）年9月、頭取高見文三郎を中心に規約を審議、設置願共に再提出し、1886（明治19）年11月19日、認可施行となった。

高見商店氷豆腐成分分析表（昭和3年2月14日第59号/1徳島県工業試験場より）（単位%）

	水分	たんぱく質	脂肪	繊維質	ミネラル	炭水化物
豆腐	88.59	5.93	3.15	1.89	0.52	—
凍豆腐	18.75	48.80	28.80	—	1.60	2.05
凍豆腐	16.50	50.80	19.40	375g中 1,280cal	1.80	11.50
豆腐	88.70	6.60	3.00	375g中 218cal	0.60	1.10

豆腐と比べ、蛋白質・脂肪分共に含有率が高い。保存期間が長くなると脂肪分が酸化し、品質が劣化する特徴がある。



展示資料一覧

No.	表題	年代	資料番号
高見家について			
1	祖旧記録(麻植郡川田村権田姓旧祖録 写)	1797(寛政9)年	効00075
2	明暦三年酉正月延宝二年元文三年午麻植郡東川田村本百姓本家勘七棟付帳(写)	1819(文政2)年	効02376
3	乍恐奉願上覚(郷鉄砲役譲渡許可願)	1830(文政13)年	効00972
4	其村玉師文三郎(郷鉄砲仰付に付苗字高見名乗許可の件)	(近世)	効01627
5	高見記録飢饉来由之事(高見家由緒書)	1837(天保8)年	効00025
6	越し方乃記(明治43年7月22日~9月5日 日記)	1910(明治43)年	効00026
7	褒状(川田局電話施設費寄付)	1924(大正13)年	効00334
8	感謝状(但馬地方震災救援金寄付に付)	1925(大正14)年	効00491
9	(高見家屋敷図)	1842(天保13)年	効00069
10	(高見家屋敷図)	1842(天保13)年	効00068
11	高見文三郎(辞令・漕場取締長助役)	1870(明治3)年	効00636
12	高見文三郎(辞令・諸紙取締長)	1871(明治4)年	効00633
13	高見文二郎(辞令・川田郵便局長)	1922(大正11)年	効00330
14	高見文二郎(徳島県特定郵便局長会会長任命状)	1943(昭和18)年	効02188
15	表彰状(郵便貯金功績表彰)	1942(昭和17)年	効02191
藍商としての高見家			
16	防長売場記録帳	1827(文政10)年~	効00679
17	(藍玉積送通行願等控綴)	1828(文政11)年~	効00678
18	譲渡申売場株書物之こと(防州表藍玉)	1859(安政6)年	効00659
19	質物差入金子借用申書物之事(児島村玉師丈右衛門持ち株)	1859(安政6)年	効00658
20	領収書(藍商取締会所新築費)	1886(明治19)年	効00487
21	大阪問屋売組合加入御届(藍商取締会所)	1889(明治22)年	効00313
高見家と川田乾燥場			
22	蚕業成績表(第弔号)	1923(大正12)年	効02299
23	昭和七年度組合長会各種書類	1925(大正14)年	効00016
24	陳情書(川田乾燥場区域内に繰糸工場設置の件)	1927(昭和2)年	効00194・効00195
25	昭和六年度出張日誌	1931(昭和6)年	効00202
26	感謝状(川田乾繭場業績進展の功勞に付)	1936(昭和11)年	効00356
27	郡是取引川田養蚕組合解散要項外7通・組合解散式挙行二関スル件	1941(昭和16)年	効00206・効00207
高見家文書に見る製紙業			
28	工藤三木次(書簡・伊予楮長州紙取引等紙関係に付願上の件)	(近世)	効01771
29	尚々本文之(一部漕人共他国紙一件等申立て予定の件)	(近世)	効01772
30	申上覚(諸郡村々紙漕人へ鑑札仰付願・控)	(明治期)	効01651
31	麻植郡三ツ木木屋平(山間村々貧困につき製糸業計画立案の件)	(明治期)	効01032
高越山凍豆腐の生産			
32	高越豆腐(高越山製造氷豆腐の件)	1928(昭和3)年	効02404
33	氷豆腐製造同業組合設置願	1885(明治18)年	効00939
34	北米合衆国シカゴ府開設コロンプス博覧会出品表	1892(明治25)年	効01586
35	上申(第3回内国勸業博覧会参観徳島県下の物品に付意見上申)	1890(明治23)年	効00948
36	氷豆腐年計勘定表	1876(明治9)年~	効02301
37	書簡・岩津より便舟にて氷豆腐出荷報告	1878(明治11)年	効00750
山川町の鉱山			
38	契約証書(高越鉱山鉱害防止契約)下書き	1927(昭和2)年	効2225
39	新聞スクラップ(川田鉱毒問題関係)一括	1937(昭和12)年	効2309
その他の産業			
40	茶畑開拓茶実植付茶園希望臨時簿付タリ楮植付	1879(明治12)年	効01328
41	開拓地茶楮植付事業書類(茶植付方伝検)	1879(明治12)年	効01446
42	上申書(煙草専売の件)	1915(大正4)年	効02255
43	煙草元売捌人指定申請書(控)	1915(大正4)年	効02251
44	大正九年度第参回営業報告書	1921(大正10)年	効00118
45	乳用山羊注文の件	1933(昭和8)年	効02262
46	乳用山羊出荷案内	1933(昭和8)年	効02261

※資料保存のため展示品の一部を替えることがあります。

☆担当職員による展示解説(文書館2階講座室・展示室)  
日時:2月18日(日)・3月18日(日) 午後1時30分から

特別企画展「高見家文書に見る  
吉野川中流域の産業」  
平成30年1月30日発行  
編集・発行 徳島県立文書館